

東京オリンピック女子バレーボール

主将 河西（中村）昌枝



山梨県中巨摩郡（現南アルプス市）出身。1933（昭和8）年7月14生まれ。山梨県立巨摩高等学校卒業後、昭和29年、日紡貝塚に入社し、大松（だいまつ）博文監督のもと、回転レシーブを武器に「東洋の魔女」とよばれたチームの主将として1962年世界選手権優勝、1964年東京五輪でコーチ兼主将として優勝に大いに貢献した。

1965年1月に日紡を退社、同年5月30日に当時の総理大臣佐藤栄作の取り計らいで2歳年上の自衛官と結婚した。2003年3月に日本バレーボール協会女子強化委員長に就任し、2004年アテネ五輪では全日本女子チームの団長を務めた。2008（平成20）年にバレーボール殿堂入りを果たした。引退後はママさんバレーを指導。

7月14日が誕生日で79歳になった。最近ではママさんバレーボールをみて歩いている（指導）。

昭和39年10月23日、東京オリンピック女子バレーの決勝戦、日本×ソ連戦の時は31歳だった。最後はソ連に勝って優勝、金メダルだったが表面は冷静さを保っていた。

小学校の頃から背が高かった。兄三人、皆、背が高く180センチ以上あった。小学生時代は戦争中、学校から帰ると畑仕事を手伝うのが日課だった。中学で戦争が終わり、バレーの先生がきっかけでバレーボールをはじめた。それまで県外へ出ることがなかったが、高校で宇都宮まで試合に行った。そこで、背が高く、日紡の足利工場工場長の目に留まり日紡に入社した。

一年目はボール拾い。二年目にレギュラーになった。バレーが好きだった。昭和29年3月に日紡貝塚に参加、大松監督の下、優勝を重ねた。昭和33年、4つの大会で優勝し、25歳の時、バレーを辞めようと思った。従来の9人制から6人制にルールがかわり、外国で試合ができる！ようになった。昭和35年の世界選手権ブラジルで銀メダルを獲得。ソ連に負けて2位だった。その後、2年間、必死に練習。昭和37年にはソ連に勝ち優勝した。ここで辞めるつもりでいたが、大松監督に身を預けた、29歳。

昭和39年10月東京オリンピック、父は8月にオリンピックを見ずに死亡。ソ連に勝ってからの2年、必死の練習をした。ミスの無い練習を一日8～10時間やっていた。出来ないことを出来るように・・・繰り返し、繰り返しの連続だった。寝る時間は短く深く、練習時間を長くした。そういう体になっていた。午前中は会社の仕事をし、午後4時ごろから真夜中の1、2時まで練習。寮では部屋の仲間が湯たんぽを用意してくれたり、洗濯物を取り込んでくれたりサポートしてもらった。

日紡貝塚の練習はきつかったが辞めた人は一人もいなかった。皆、競い合った。鬼の大松、練習は厳しい人だった。口数は少ない人だった。厳しさ、優しさを兼ね備えていた。大松監督はコーチをおかず、監督が一人でボールを打った。先生は打ち続けていた。先生の一生懸命さに皆がついていった。自分がコーチ兼選手だった。大松監督は精悍な顔をしていた。

東洋の魔女達とは時々会う。昔と同じ不思議な仲間。1964（昭和39）年、日本は発展の途上、女が外に出て働くのが珍しい時代だった。

ママさんバレーが始まって50代のママさんバレー、60代の、70代のそれぞれの全国大会がある。体を動かしていると健康で楽しい！

東洋の魔女達は河西は怖かったという。夕方の6時頃、監督がくるまでは自分が監督のかわりをしていた。



東洋の魔女

東洋の魔女は、実業団女子バレーボールチームの雄だった日紡貝塚チームの選手を主力とし、1962年（昭和37年）にモスクワで開催された第4回世界バレーボール選手権大会で当時世界一であった旧ソ連チームを破り優勝した全日本女子バレーボールチームを「東洋の魔女恐るべし」と評したロシア語の造語からつけられたニックネームです。

ニチボー貝塚チームを主力とした全日本女子バレーボールチームは、2年後の1964年（昭和39年）の東京オリンピックにおいても、回転レシーブや変化球サーブを駆使して金メダルを獲得しました。この金メダル獲得に起因して日本では空前のバレーボール・ブームが起こりました。

東京オリンピックでの決勝戦の解説をしていたアメリカのテレビ局コメンテーターが、日本勢の攻撃の度に「オリエンタル・ウィッチ」（The Oriental Witches、直訳：東洋の魔女）の呼び名を連発した事から、このニックネームが広く知られるようになりました。